福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1382集

元　寇　防　塁

調 査 総 括 報 告 書

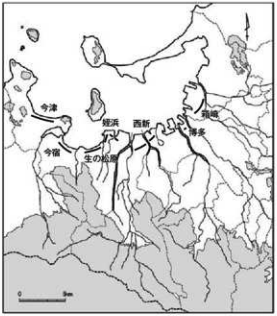
２０１９

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1382集

元　寇　防　塁

調 査 総 括 報 告 書



遺跡名	遺跡略号
元寇防塁	GKB
博多遺跡群	HKT
箱崎遺跡	HKZ

2019

福岡市教育委員会

上段　元寇防塁第12次（今津）２区防塁前面（北から）
下段　上　左：元寇防塁第８次（西新）石塁検出状況（西から）　右：元寇防塁第８次（西新）土塁・石塁断面（東から）
　　下　左：元寇防塁第11次（今津）石塁検出状況（西から）　右：博多遺跡群第111次Ａブロック（北西から）

序

文永の役（1274年），弘安の役（1281年）という２度の戦乱を巻き起こした，「蒙古襲来」は，東アジア世界における歴史のうねりの中で生じた大事件であり，当時の日本に多大な影響を与え，社会の変革をもたらすきっかけともなりました。

文永の役の後，蒙古軍の再襲来に備えて上陸を阻止すべく，博多湾岸一帯に巡らせた「元寇防塁」は，本市のみに存在する世界史的にみても貴重な文化財です。10か所が国指定の史跡となり，その内のいくつかでは当時のままの姿を間近に見学することができます。海浜の松原の中で延々と続く石垣の姿は，「蒙古襲来」が当時の人々に与えた衝撃の大きさを物語っています。

本書は，昭和40年代以降，本市などで行われた「元寇防塁」発掘調査の成果をまとめ，その意義と今後の課題を示したものです。本書が市民の皆様の文化財，そして地域の歴史に対する理解の一助となり，また考古学，文献史学などにおける研究資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが，これまでの調査において様々なご協力をいただいた方々，埋蔵文化財としての「元寇防塁」保護にご理解，ご協力をいただいた方々，今日においても，史跡「元寇防塁」を地元の宝として，保全や活用に多大なご尽力をいただいている方々など，文化財「元寇防塁」の保護に係るすべての皆様に深く感謝申し上げます。

平成31年３月25日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　言

・本書は、福岡市教育委員会もしくは福岡市が行った、これまで報告を行なった元寇防塁調査（元寇防塁第１～14次調査、博多遺跡群第111次調査）の総括編である。加えて、九州大学が行なった箱崎遺跡第81・83・85・87次調査についても、元寇防塁に関する調査成果の一部を記している。

・未報告の第４・11～14次調査については、その概要を述べるにとどめている。

・本書の執筆・編集は、藏冨士寛が行なった。

目　次

はじめに　―元寇防塁について―　……　1

第Ⅰ章　調査・研究史　……　2

1．調査・研究の始まり　……　2

2．史跡指定と戦後の調査　……　2

第Ⅱ章　発掘調査の概要　……　5

1．今津地区　……　5

2．生の松原地区　……　9

3．姪浜地区　……　13

4．西新地区　……　14

5．博多地区　……　18

6．箱崎地区　……　21

第Ⅲ章　総括　―元寇防塁調査の成果と課題―　……　24

おわりに　……　25

挿図・表目次

図1　元寇防塁位置(1/200,000)…… 1
図2　防塁・石積み遺構の断面・標高(1/200)…… 4
図3　今津地区(1/50,000)…… 5
図4　元寇防塁第２次調査の防塁(1/60)…… 6
図5　元寇防塁第11・12・14次調査位置(1/10,000)…… 7
図6　生の松原地区(1/10,000)…… 9
図7　元寇防塁第１次調査A2・D区(1/800・100)…… 10
図8　元寇防塁第７次調査(1/300・100)…… 12
図9　姪浜地区(1/10,000)…… 13
図10　西新地区(1/10,000)…… 15
図11　元寇防塁第３次調査(1/1,000・60)…… 16
図12　元寇防塁第８次調査(1/200・60)…… 17
図13　博多地区(1/10,000)…… 19
図14　博多遺跡群第111次調査(1/500・100)…… 20
図15　箱崎地区(1/10,000)…… 21
図16　箱崎遺跡第81・83・85・87次調査(1/6,000・120)…… 23
図17　元寇防塁の分類…… 24

表1　元寇防塁発掘調査一覧…… 3
表2　元寇防塁の構造分類…… 24

図版目次

巻頭図版

上段　元寇防塁第12次〔今津〕２区防塁前面（北から）
下段　上　左：元寇防塁第８次〔西新〕石塁検出状況（西から）
　　右：元寇防塁第８次〔西新〕土塁・石塁断面（東から）
　　下　左：元寇防塁第11次〔今津〕石塁検出状況（西から）
　　右：博多遺跡群第111次Aブロック（北西から）

図版１

上段　左：元寇防塁第２次〔今津〕Ⅰ－③区石塁断面（北東から）
　　右：元寇防塁第２次〔今津〕Ⅱ－③区背面（南東から）
中段　左：元寇防塁第２次〔今津〕Ⅳ－②区石塁検出状況（東から）
　　右：元寇防塁第２次〔今津〕Ⅳ－②区石塁背面（南西から）
下段　左：元寇防塁第２次〔今津〕Ⅲ区－⑫～㉔石塁検出状況（西から）
　　中：元寇防塁第１次〔生の松原〕Ａ・B地点石塁検出状況（西から）
　　右：元寇防塁第１次〔生の松原〕Ａ－２区背面（南から）

図版２

上段　左：元寇防塁第３次〔西新〕Ⅰ区防塁断面（西から）　右：元寇防塁第３次〔西新〕Ⅰ区防塁粘土層（南西から）
２段　左：元寇防塁第３次〔西新〕Ⅰ区防塁前面（北から）　右：元寇防塁第３次〔西新〕Ⅰ区防塁背面（南から）
３段　左：元寇防塁第８次〔西新〕石塁・土塁（北西から）　右：元寇防塁第４次〔姪浜〕詳細不明
下段　左：元寇防塁第12次〔今津〕２区後背斜面（南から）　右：元寇防塁第14次〔今津〕１区石塁前面（北西から）

はじめに　―元寇防塁について―

元寇防塁とは，文永の役（1274年）の後，蒙古軍の再襲来に備え上陸を阻止するため，1276（建治２）年の３月から８月の半年間に，博多湾岸一帯の20kmにわたる砂丘上に築き上げられた石塁を指す。史料上では「石築地」と記されるが，中山平次郎が「元寇防塁」という名称を使用して以来，これが定着することになる（中山1915a）[註1]。ただ中山は，元寇防塁を「高く砂堤を盛り，その上に石による障壁を築いたもの」とし，この構築物に対し，砂堤の存在を等閑視した「単なる石塁や石垣という名称は不当である」と考えており（310・311頁），これを尊重すれば，元寇防塁とは石塁だけではなく，石塁地盤の盛土や石塁後背部の盛土，土塁，溝状遺構など，この防御施設に関わる設備すべてを含む総称として捉えるべきだろう。

元寇防塁の築造は，鎌倉幕府により地域ごとに九州各国に割り当てられ，所領１段につき石築地１寸の割合で御家人等に課役された。地勢的に区分された，元寇防塁の存在する博多湾岸８地区に分ける分担国は，以下のように想定されている（川添1968）。

(1)今津地区：大隅・日向，(2)今宿地区：豊前，(3)生の松原地区：肥後，(4)姪浜地区：肥前

(5)西新地区：不明，(6)博多地区：筑前・筑後，(7)箱崎地区：薩摩，(8)香椎地区：豊後

弘安の役（1281年）の後も，蒙古軍に対する警戒から，室町時代にいたるまで元寇防塁の補修は続けられた（川添1968）。その痕跡は，元寇防塁第1次調査（生の松原地区），博多遺跡群第111次調査（博多地区）で検出した石塁においても確認することができる。

註1　「元寇防塁」という名称は，1913年の今津地区における発掘調査時の講演会において，中山が「仮称した」とみなすことが多いが，実際はさらに早く（川添2006），少なくとも調査前年の九州大学における新入生歓迎の講話の際，中山はすでに使用していることが明らかになっている（池田2016）。

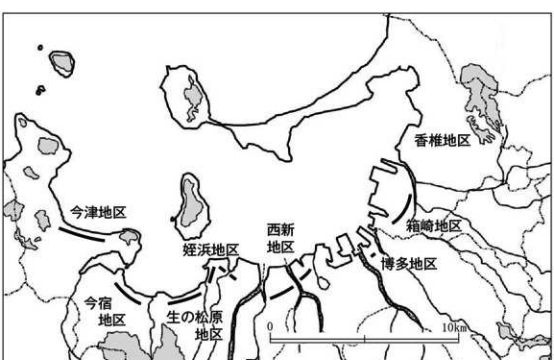


図１　元寇防塁位置（1/200,000）

第Ⅰ章　調査・研究史

1．調査・研究の始まり

元寇防塁の調査・研究史は，川添昭二（川添1971・1977・2006），柳田純孝（柳田1984），堀本一繁（2010・2018）らの研究に詳しい。これらを参考に，本報告に関わるものを中心にみていくことにしたい。元寇防塁研究は，大正時代に入り大きな進展をみせるが，これには２つの特色を見出すことができる。まず１つは，在地の研究者がこの流れを牽引したことで，元寇防塁研究の主導的役割を果たした中山平次郎は，九州帝国大学医科大学の教授であり，1913（大正２）年に発足した「筑紫史談会」は，「蒙古襲来」を主要な研究テーマの一つとし，元寇防塁研究に関しても武谷水城を中心に多大な業績を挙げた。２点目は，発掘調査や現地踏査といった，実地での経験を元に研究が進展したことで，今津・西新・箱崎等の地区において発掘調査が実施され（表１），踏査による石塁の遺存状況や微地形の把握にも注意が払われるようになった（中山1913a・b，川上1941など）。発掘調査により，石塁構造（中山1915b，武谷1921・1922，島田1925など）や使用石材（木下1915）といった元寇防塁に対する知識も増え，香椎地区では類似遺構に対する認否が議論されるまでになった（武谷1921・1922）。また，踏査時の所見は，今日では見ることのできない往時の様子を伝えるものであり，その価値は中山平次郎による箱崎地区における元寇防塁の推定位置が，九州大学旧箱崎キャンパス内における発掘調査によって追認されたことからも明らかである（岩永2018）。

2．史跡指定と戦後の調査

このような大正期を中心とする1910～20年代の研究や調査を通じて高じた，元寇防塁への関心は，1931年の国史跡指定へと結実する[註1]。都市化進展に伴い，遺跡荒廃の危険性が増加したことから，その保存が急務とされ，元寇防塁は，1931（昭和6）年3月30日，文部省告示第116号によって，下に示す10地点が国の史跡に指定され，1981（昭和56）年3月16日には，今津地区の一部が追加指定を受けた。各地区における史跡およびその所在地は以下の通りである。

(1)今　津　地　区：①西区今津・大原
(2)今　宿　地　区：②西区横浜二丁目（今山地区），③西区今宿駅前一丁目（今宿地区）
(3)生の松原地区：④西区生の松原一丁目・小戸五丁目
(4)姪　浜　地　区：⑤西区小戸三丁目（向浜地区），⑥西区小戸一丁目（脇地区）
(5)西　新　地　区：⑦早良区百道一丁目（藤崎地区），⑧早良区西新七丁目（西新地区），
　　⑨中央区地行二丁目（地行地区）
(6)博　多　地　区：無し
(7)箱　崎　地　区：⑩東区箱崎六丁目・筥松四丁目（地蔵松原地区）
(8)香　椎　地　区：無し

文永の役（1274年），弘安の役（1281年）という２度にわたる蒙古襲来は，日本だけに留まらない，東アジア史全体の中で語られるべき事件であり，中世段階の日本社会にも多大な影響を与えている。その蒙古襲来を象徴的に示す「元寇防塁」は，本市にのみ存在するかけがえの無い文化財であるといえる。史跡指定の後，1978（昭和53）年には，福岡市教育委員会によって，史跡元寇防塁の保存管理計画が策定され（福岡市教育委員会編1978），以後担当課によって史跡の適切な維持・管理が図られている。

戦後の1960年代，都市の発展に伴い周辺環境の急速な開発が進展し，再び史跡元寇防塁に対する影響が懸念される事態となった。そこで福岡市教育委員会は，史跡元寇防塁の保存整備事業計画を策定し，その保存と活用を促進するため，九州大学鏡山猛教授を団長とする調査団を結成し，1967～69年の3カ年にわたって，生の松原・今津・西新各地区の学術調査を行なうこととなった（元寇防塁第1～3次調査）。福岡市が主体となって初めて実施したこれら調査以降，今津，生の松原，姪浜，西新，箱崎の各地区において，史跡整備等に伴う事前調査，開発に伴う緊急調査や確認調査など，様々な形で発掘調査が実施されている。表1は，これまで実施された元寇防塁発掘調査の一覧であり，本書は第1次調査以降の発掘調査を概観し，その成果と今後の課題についてまとめるものである。

早くから所在が確認できた元寇防塁は，史跡指定という形で保存が図られた。それ以外の元寇防塁については，推定する位置（推定線）を埋蔵文化財「元寇防塁」として『福岡市文化財地図』に掲載するとともに，推定線上およびその周辺に対して，開発に先立つ事前審査を行ない，確認・試掘調査を通じてその周知と保全に努めている。

緊急調査において石積みや石塁遺構が検出された場合，これまで元寇防塁の所在が特定されていない博多地区や香椎地区といった地域では，それが元寇防塁であるか否かの判断が難しい。これら地域において，元寇防塁である可能性が指摘された遺構には，博多遺跡群第68次調査石積み遺構（SX32）（井澤編1992），博多遺跡群第103次調査石積み遺構（福岡市教育委員会編1996），博多遺跡群第111次調査石塁遺構（佐藤編2002），香椎地区遺跡調査石積み遺構（大塚編2002）がある。なお，博多遺跡群第68次調査SX32と第103次調査石積み遺構は，一連の遺構として理解可能である。

表1　元寇防塁発掘調査一覧

調査年	調査次数	調査番号	地区名	所　在	調査主体	調査原因	備　考	文　献
1913（大正2）		191301	今津	西区今津	史蹟現地後援会		福岡日日新聞社主催。百沙門山西麓より西へ2丁，5丁の2地点を調査。	福岡日日新聞社主催，百沙門山西麓より西へ2丁，5丁の2地点を調査。
1920（大正9）		192001	西新	早良区西新7丁目	西新尋常高等小学校	教育勅語下賜30周年記念事業として調査。	西新地区の史跡指定地内における最出展示無所の調査。	武末1921
1920（大正9）		192002	箱崎	東区箱松4丁目		史跡指定に向けた外務省考査官調査の一環で。	箱崎松原地区の史跡指定地内の調査。防塁痕跡を確認。	武末1922，堀本2018
1921（大正10）		192101	香椎	東区香椎駅前1丁目		史跡指定に向けた内務省考査官調査の一環か。	香椎村浜黒。元寇防塁ではない可能性（大塚2013）。	武末1921・1922
1921（大正10）			姪浜	西区小戸3丁目		史跡指定に向けた内務省考査官調査の一環か。	姪浜町向浜	武末1921，川上1941
1921（大正10）		192102	姪浜	西区小戸1丁目		史跡指定に向けた内務省考査官調査の一環か。	姪浜町阿闍	武末1921・1922，川上1941
1924（大正13）		192401	西新	早良区西新3・6丁目		道路建設	島田資次郎による立会調査。出土した防塁石材は芳崎亮に展示。	島田1925，伊藤2017
1957（昭和32）		195701	今津	西区大原	福岡県教育委員会	道路建設		
1967（昭和42）	元寇防塁第1次	6701	生の松原	西区生の松原1丁目	九州大学考調査団	史蹟整備		市教委編1968
1968（昭和43）	元寇防塁第2次	6801	今津	西区今津	九州大学考調査団	史蹟整備		市教委編1969
1969（昭和44）	元寇防塁第3次	6901	西新	早良区西新7丁目	九州大学考調査団	史蹟整備		市教委編1970
1978（昭和53）	元寇防塁第4次	7848	姪浜	西区姪浜字脇	市教委蔵文化財課	公営共同住宅建設		柳沼1984・1988
1993（平成5）	元寇防塁第5次	9305	箱崎	東区箱崎6丁目	市教委蔵文化財課	仮設倉庫建設		市教委編1995
1996（平成8）	元寇防塁第6次	9662	西新	早良区百道1丁目	市教委蔵文化財課	専用住宅建設		市教委編1998
1998（平成10）	元寇防塁第7次	9817	生の松原	西区生の松原1丁目	市教委蔵文化財課	史跡整備		池崎2001
1998（平成10）	博多遺跡群第111次	9836	博多	博多区奈良屋町	市教委蔵文化財課	学校建設		佐藤編2002
1999（平成11）	元寇防塁第8次	9939	西新	早良区西新6丁目	市教委蔵文化財課	校舎建設		大塚編2002
2000（平成12）	元寇防塁第9次	0035	箱崎	東区芦松3丁目	市教委蔵文化財課	消防況島舗装建設		市教委編2002
2005（平成17）	元寇防塁第10次	0546	香椎	東区香椎駅前1丁目	市教委蔵文化財課	共同住宅建設	検出した石積み遺構は，近世規模の護岸。元寇防塁ではない。	大塚編2007
2015（平成27）	元寇防塁第11次	1531	今津	西区今津	市文化財保護課	重要遺跡確認		市教委編2016
2016（平成28）	元寇防塁第12次	1630	今津	西区今津	市文化財保護課	重要遺跡確認		市教委編2017
2000（平成12）	元寇防塁第13次	0081	姪浜	西区小戸1丁目	市教委埋蔵文化財課	共同住宅建設		
2017（平成29）	元寇防塁第14次	1733	今津	西区今津	市史跡整備活用課	重要遺跡確認		市教委編2018
2016（平成28）	箱崎遺跡第81次	1625	箱崎	東区箱崎6丁目	九州大学	重要遺跡確認	九州大学調査次数：HZK1603・1604次調査	福田・森編2018
2017（平成29）	箱崎遺跡第83次	1703	箱崎	東区箱崎6丁目	九州大学	重要遺跡確認	九州大学調査次数：HZK1701次調査	市教委編2018
2017（平成29）	箱崎遺跡第85次	1730	箱崎	東区箱崎6丁目	九州大学	重要遺跡確認	九州大学調査次数：HZK1702次調査	市教委編2018
2017（平成29）	箱崎遺跡第87次	1732	箱崎	東区箱崎6丁目	九州大学	重要遺跡確認	九州大学調査次数：HZK1704・1705・1706次調査	市教委編2018

市教委：福岡市教育委員会
市：福岡市

香椎地区遺跡調査の石積み遺構は，基底部から胴木が検出され，またこれに寛永通宝が伴っていることから，近世段階の護岸施設であることが判明している。この調査が行われた浜男地区では，元寇防塁が存在することを武谷水域が報告しているが（武谷1921），この調査の結果を照らし合わせれば，武谷の報告した構造物が元寇防塁である可能性は低い（大塚2013）。

また，博多遺跡群におけるこれら遺構について大塚紀宜は，元寇防塁である今津，生の松原，西新各地区の石塁は，断面箱形で前面は石を積み上げて壁を造ること，基底部の標高が３～４ｍに収まること，立地する砂丘斜面は傾斜が緩やかなこと，といった共通点があるのに対し，博多遺跡群第68・103次調査石積み遺構は，砂丘面に沿って幅広く平面的に石が積まれること，基底部分の標高が１ｍ以下であること，立地する砂丘の面が急であること，博多遺跡群第89次調査で検出された16世紀末～17世紀の護岸施設と構造が類似することから，これは元寇防塁ではなく護岸施設であると考えた（大塚2013；図２）。博多遺跡群第68次調査の担当者も，石積み遺構に護岸の機能があったことは否定しておらず，その上端部に石塁状の堤防があった可能性を指摘する（井澤編1992：126－133頁）。大塚が指摘するように，既知の元寇防塁との違いがあまりに大きく，今回の報告にこれら調査は取り上げないが，蒙古襲来への備えの一つとして，何らかの役割を果たしていた可能性は否定できない。今後類例の増加を待って，改めて検討する必要があるだろう。

一方，博多遺跡群第111次調査の石塁遺構は，元寇防塁における石塁の構造と類似することから，元寇防塁である可能性が高いとする（大塚2013）。今回の報告ではこの石塁遺構を元寇防塁として取り上げるが，可能性は高いながらも，延長線上における他の防塁発見という裏付けが取れていないため，福岡市では元寇防塁ではなく，あくまでも「石塁遺構」と呼んでいる。

註１　1931年は満州事変が勃発した年であり，「神国思想」「神風」という独特の観念をもたらした，蒙古襲来と関係の深い元寇防塁に指定に，当時の世相が大きな影響を与えた可能性は高い。

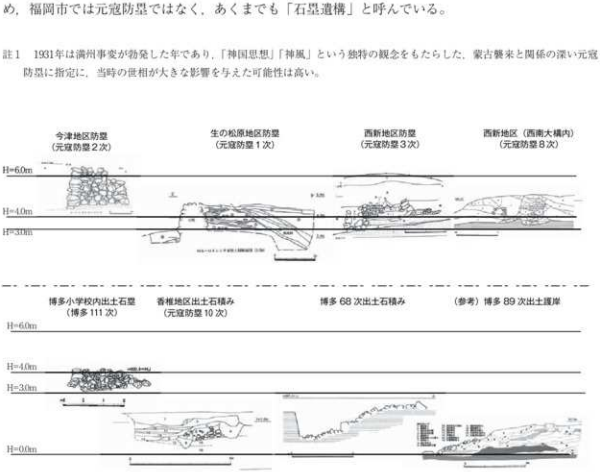


図２　防塁・石積み遺構の断面・標高（1/200）

第Ⅱ章　発掘調査の概要

1．今津地区

博多湾岸の西端に位置し，元寇防塁は東の毘沙門山，西の柑子岳に挟まれた，長さ約3kmの海岸砂丘上に存在する。その大部分は史跡指定を受けており，遺構の遺存状況が良好な地区である。この地区では，これまでに元寇防塁第2・11・12・14次の各調査が行なわれている。

元寇防塁第2次調査（福岡市教育委員会編1969）

【調査の経緯・方法】

元寇防塁の保存と活用を促進するため，九州大学鏡山猛教授を団長とする調査団により，1967～69年の3カ年にわたり実施された学術調査の一つであり，この第2次調査は1968年に行なわれた。

西の大原地区から東の毘沙門山山麓にいたる，今津地区における元寇防塁指定地全体をⅠ～Ⅳの4区に分け，Ⅰ区に3カ所（Ⅰ区－②～④），Ⅱ区に6カ所（Ⅱ区－①～⑥），4区に2カ所（Ⅳ区－①・②）の調査区を設定している。Ⅲ区では長さ100mのトレンチを設定し，西から5mごとに①～⑳までの番号を付している。また，砂丘の高いところほど，石墨の遺存状況が良いことから，Ⅲ区－①の西側42mの高所にトレンチを設定（Ⅲ区－⓪）しており，そのためⅢ区における調査区は，Ⅲ区－⓪，Ⅲ区－①～⑤（5×25m），Ⅲ区－⑩，Ⅲ区⑫～⑳（5×45m；図版1：下段左）の4カ所となっている。以上の15カ所において，調査が実施された。

【防塁の構造】

確認した防塁は粘土等を全く使用せず，石と砂のみで構築する。石材は割石もしくは自然石で，石墨構築のための特別な加工は施されていない。Ⅰ区－③の石墨は，前面高2.60m，後面高1.45m，底面幅3.10m，上面幅2.50mの断面台形を呈しており，これが石墨の標準的な形態と目されている（図版1：上段左）。すべての調査地点において石墨の上部は失われており，石墨の高さや上面幅は不明だが，Ⅱ区－⑤で確認した石墨の前面高は2.83mであり，少なくとも3m近い高さを持つ石墨が存在していたことは明らかである。

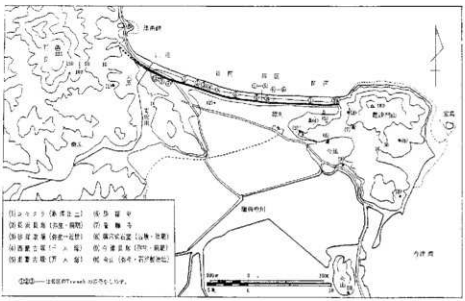


図3　今津地区（1/50,000）

石墨は砂丘の上に直接積み上げられ，基底部の前面は後面より低い。これは，石墨が海側へと傾斜する砂丘面上に築造されたことを示しているが，前面を掘り込み，安定した砂丘の上に石を積み上げることで，より強固な石墨を築く意図があった可能性もある。石墨前面は，最も大きな奥行きの長い石を使用し，傾斜角度を76～86°に保つ。後面は前面よりわずかに小さな石が用いられ，傾斜角度も緩く70～80°となっている。

また，毘沙門山の麓では，山裾と石墨の接続部が確認されている（Ⅳ区－②：図版１：中段）。山裾の西側斜面に古墳の葺石状に石を積み，石墨前面はこの山裾斜面の葺石部へとつながっている。他と異なり，前面の傾斜は緩やかで，石墨の前へ降りやすい形となっており，この付近の字名が「門戸口」「戸口」であることから，この部分に石墨の出入口があった可能性が指摘されている。なお，背面は他と同じ傾斜角度を保ち，６～７段の玄武岩円礫が積み上げられている。

【使用石材】

Ⅱ区－①以西は花崗岩，Ⅲ区より東は玄武岩を主体とし，その間では，花崗岩と玄武岩が一定の単位で交互に認められ，ほぼ同じ割合で分布するという。花崗岩は今津地区西側に存在する柑子岳麓の津舟崎，玄武岩は東側の毘沙門山をその産地と目することができ，このような使用石材のあり様は，石材採取地との距離がそのまま反映されていると考えることができる。また，Ⅱ区－②・③やⅢ区－⓪で検出された石墨底面の石材に付着したオオヘビガイやカキは，海岸付近で採取された転石も使用されていることを示す。

Ⅱ区－③では，主たる使用石材の異なる石墨の接合部が確認されている（図版１：上段右）。接合部より西側の石墨は玄武岩，東側の石墨には花崗岩を多用しており，接合状況の観察からは玄武岩側が先に構築され，その後に花崗岩側が接続されたと判断されている。石墨の底面高は食い違いがあり，図面上では0.3～0.4mほど玄武岩側が低い。これは，接合部分において先に構築された玄武岩側の石墨に，後になって花崗岩側の石墨が接続する際に生じた齟齬であると解釈されている。また，両者は内部構造においても違いがあり，花崗岩側の石墨は前面と背面に石を積み内部に砂を入れて構築しているのに対し，玄武岩側の石墨は内部にいたるまですべて石で造られている。

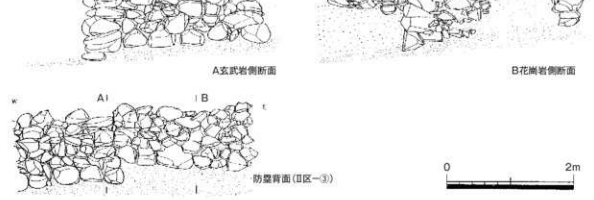


図４　元寇防墨第２次調査の防墨（1/60）

【特記すべき調査成果】

この調査において，石塁には構築の過程で生じた接続部分が確認できること，またこの接続部分を境に使用石材の違いが認められることも多いこと，そして玄武岩主体の石塁と花崗岩主体の石塁とでは内部構造が異なること，といった事実が明らかになった。

『薩藩旧記』雑録によれば，段別一寸の石塁（石築地）の築造を促した記録があり，築造にあたった御家人等の所領に応じて分担する長さが決められたと考えられていることから，報告書ではこのような石塁構造や使用石材の違いが，この築造分担分の違いを表しているとする解釈が示されている。Ⅱ区－①の東側からⅢ区にかけては，石塁の主体となる石材が，８～125mと様々な長さごとに玄武岩と花崗岩交互に繰り返すという興味深い現象が確認されており，一つの石材による石塁の長さが担当者の所領に応じるという先の解釈の根拠となっている。

ところで，Ⅱ区－⑥では，石塁前面の高さが低く，後面に広い傾斜面を持ち，斜面上に礫を配した防塁が確認されており，後述する第12次調査時の防塁（③区）との共通性が注目される。

【調査終了後】

多くは埋め戻しを行ない，地中にて保存されているが，Ⅲ区－⑫～⑳は1972年に整備工事がなされ，石塁の露出展示が行われている。

元寇防塁第11・12・14次調査（福岡市教育委員会編2016・2017・2018）

【調査の経緯・方法】

今津地区元寇防塁の調査・整備が終了して40年以上が経過し，再び史跡の補修や再整備の必要性が検討されるようになった。そこで，2015～2017年度の３カ年にわたり，元寇防塁の現状確認と新規の情報収集を目的とする確認調査を実施した。関連調査は現在も継続中であり，発掘調査報告書も未刊行のため，ここでは概要と現時点での所見を述べるにとどめる。

第11次調査は，石塁露出部分に６×18mの調査区を設定し，2015年11月～2016年２月にかけて調査を行なっている。第12次調査は，現地表面から観察できる石塁推定線上の２か所（１・２区）に，１区は４×６m，２区は11×３mの調査区を設定し，2016年11月～2017年２月にかけて調査を行なっている。第14次調査は，石塁線確定のため地表観察において所在の不明確な２か所（１・２区）に，１区は９×４m，２区は６×３mの調査区を設定し，2017年11月～2018年２月にかけて調査を行なっている。以上，調査の実施は計５カ所であり，記述の簡便化を図るため東から順に，①区（12次－１区），②区（11次），③区（12次－２区），④区（14次－１区），⑤区（14次－２区）と表記する。

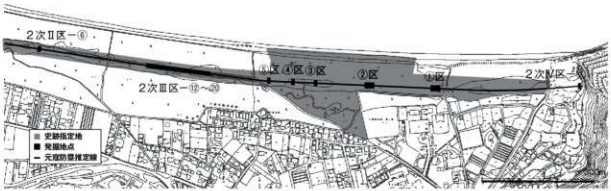


図５　元寇防塁第11・12・14次調査位置（1/10,000）

【防塁の構造】

①区では，幅2.6mの石塁を検出した。前・背面の両側に大形の石材を積み，内部に小形の礫を充填している。調査は石塁上面の検出のみにとどめている。②区では，幅2.5～2.8mの石塁を検出した（巻頭図版：下段下左）。石積みのあり方は①区と同様である。ここでも石塁の大部分は上面の検出のみに留めているが，前面の一部のみ深掘りを実施し，石組みは約２m残存していることを確認している。③区では，石塁前面の石積み及び背面側斜面の石敷きを検出した（巻頭図版：上段，図版２：下段左）。前面の石積みは大形塊石を整然と配置したもので，高さ0.8m，１～３段分が残存している。基底部には石材を立て，面をそろえている。前面石積みの背後には幅１～1.3m程の控え積みがあるが，これには小礫に加え前面石積石材と変わらない大形塊石も使用されている。控え積み背後の幅1.2～1.4mの間で，石材はほとんど出土していない。前面石積みより2.4m後方には，石塁前面に平行して列状に並んだ小塊石がある。これら小塊石の上面の高さは前面石積みの高さとほぼ等しい。それから後方は20°程の緩斜面となり，その上には大小様々な塊石が乱雑に置かれている。石積み破損時の転石も一部含まれている可能性もあるが，石積み前面の石材より明らかに大きい石材が存在することや，調査区内の斜面に偏りなく存在すること，すべてを転石と考えるには量が多いことから，これら石材の多くは斜面部分に配置された敷石であると判断している。

③区の防塁構造について，現在大きく２つの解釈を考えている。一つは背面に並んだ小塊石を背面石積みの基底石とみなすもので，これによれば内部に砂を充填した，底面幅３m程の石塁を想定することができる。しかし，基底石と考えるには石材が小形で，石材長軸を石塁線に直交して配置していないことに違和感を覚える。また，前・背面における基底石底面の高低差が0.7m程度存在することや，背面石列が置かれた場所が砂丘基盤面ではないことも，注意しなければならない点だろう。次は，石塁が前面石積みだけの石垣状を呈し，背面には砂を盛り上げた斜面が付くものである。斜面上の敷石は盛り上げた砂の流出を防ぐ機能も考えることができる。この場合，前面石積みの高さは，後背斜面の角度を考えれば２m以内に収まるものだろうか。今津地区では２次調査２区－⑥地点において，背面に盛土斜面が付く同様の防塁が確認されているが，石積部分が石垣状か否かが判然としない。同様の例としては，後述する箱崎遺跡第61次調査等で確認された，箱崎地区の防塁がある。④区では，上端面の幅３m，基底部の幅3.3m，前面石積みの高さ1.4mの石塁を検出した（図版２：下段右）。前面石積みは大形礫を１～３段積み上げ，背面にはやや小ぶりな礫を４段程度積み上げている。前面はほぼ垂直に立ち上がっているのに対し，背面の傾斜は緩やかであり，両壁面の内部は，砂と玄武岩の角礫によって充填されている。⑤区では，石塁石材と推測される塊石が散在するのみである。当地点の石塁はすでに失われている可能性が高い。

【使用石材】

①区では花崗岩と玄武岩の混用，②・③・④区では玄武岩主体の石材使用が確認できる。

【特記すべき調査成果】

①・②区の防塁は，石塁のすべてを石材のみで構築するもの，③区は前面にのみ石垣状の石積みを施し，背面に敷石を施した盛砂による斜面を付すもの，④区は前・背面石積みを施し，中に石・砂を充填するものと，様々な構造の防塁を確認することができた。

【調査終了後】

いずれも埋め戻しを行ない，地中保存を行なっている。また，当初より地表に石材が露出していた①・②区に関しては，ロープ柵による注意喚起を行っている。

2．生の松原地区

博多湾岸の西側に位置し，元寇防塁は，西を長垂丘陵，東を十郎川に画された長さ1.7kmの海岸砂丘上に存在する。元寇防塁の大部分は史跡指定を受けており，現地を踏査すれば，地表より露出した石塁を確認することができ，遺構は比較的良好に遺存しているといえる。この地区ではこれまで，元寇防塁第１・７次調査が行われている。

元寇防塁第１次調査（福岡市教育委員会編1968）

【調査の経緯・方法】

元寇防塁の保存と活用を促進するため，九州大学鏡山猛教授を団長とする調査団により，1967～69年の３カ年にわたり実施された学術調査の一つであり，この第１次調査は1967年に行なわれた。

生の松原地区東端近くの，約60mにわたる石塁露出部分をＡ地点（10×65m），Ａ地点（Ａ２区）より32m西側をＢ地点（12×３m），そして当地区西側の各所をＣ～Ｆ地点（10×３m）とし，これら各調査区において発掘を実施している。Ａ地点では，３×10mの範囲を１区として，調査区を西からＡ１～22区に細分しており，図７によればＡ２～７区，A11区，A16区，A22区で実際の発掘を行なっているようだ。

【防塁の構造】

生の松原地区東側のＡ・Ｂ地点と，西側のＣ～Ｆ地点では様相が異なり，防塁の構造は大きくこの２つに大別できる。Ａ・Ｂ地点では，前面の石積みを砂丘傾斜面から掘り下げた上で石塁を構築する。前面には塊石を置き，その後方に円礫を詰め，最後方に小塊石を前面基底石より高いレベルで配する。石塁の幅は1.5m前後で，高さは0.6～0.8mが残る。石塁後ろには，粘質土と砂を利用して平坦面が造られ，その後方には自然砂丘の傾斜を利用した傾斜面が続く。Ａ５区より西側では，傾斜面上に玄武岩礫が粗雑に配されている（図版１：下段右）。Ａ，Ｂ両地点とも石塁の構造に大きな違いはないが，Ｂ地点は平坦面3.5m，傾斜面4.5mであり，いずれもＡ地点の倍の大きさとなっている。

図６　生の松原地区（1/10,000）

ところで，Ａ・Ｂ地点の中ほどから西へ向かって，石墨の前側に１列，１～２段ほどの積み石が長さ32mにわたって続いている（図版１：下段中）。この石積みは石墨石材とは異なり玄武岩等を使用しており，防墨が0.4m程埋まった後に造られていることが判明している（西園・柳田2001）。この第１次調査時における担当者の一人である柳田純孝は，これは「防墨が海側に傾くのを防ぐための石積み」であり，史料にみる「高（かさ）」にあたると考えている（西園・柳田2001：57頁）。

Ｃ～Ｆ地点では，石積みの構築方法はＡ・Ｂ地点と等しく，石墨幅も1.5～２mと同様であるが，石墨の基底部は，前後共に同じ高さで，石材もやや大形となっている。石墨の後方には，Ａ・Ｂ地点と同じく後列基底部と同じ高さで粘質土が敷かれているが，粘質土はＡ・Ｂ地点より厚めで，幅2.5mと広範囲に施されている。また，後背面の傾斜もわずかで，Ａ・Ｂ地点のように平坦面―斜面といった構造を取ることはない。

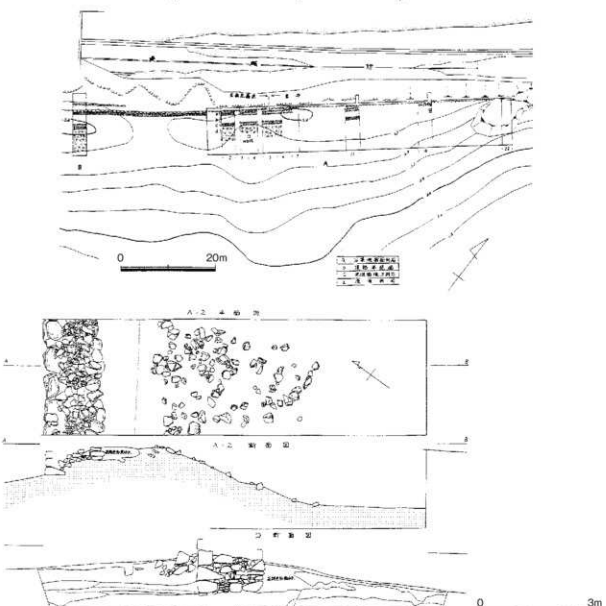


図７　元寇防塁第１次調査Ａ２・Ｄ区（1/800・100）

【使用石材】

石墨を構成する主な石材は砂岩，ペグマタイト（巨晶花崗岩），玄武岩である。砂岩は姪浜石と呼ばれ，当地区東側の姪浜地域一帯に存在する独立丘陵で採取でき，ここから最も近い小戸山や妙見崎周辺で入手したと考えることができる。ペグマタイトは防墨西端が接続する長垂山周辺で採取できる。玄武岩は，この地に最も近い残島や今山を採取地の有力候補と考えることできる。

Ａ地点の石墨では，主に砂岩とペグマタイトを使用しているが，Ａ５区において，東側では砂岩，西側ではペグマタイトと，使用石材がはっきり分かれた境目が確認された。これは，砂岩の採取地が生の松原地区の東側，ペグマタイトの採取地が西側にあり，それぞれの地より石材を運搬しながら石墨を構築していった結果，その境界がＡ５区において表れたと解釈されている。

【特記すべき調査成果】

文献によれば，姪浜地区には肥前国，生の松原地区には肥後国によって，番役及び警護がなされたことが判明しており，報告書ではＡ区における使用石材の境目は，分担地域の違いが表れたものと解釈された。石墨における使用石材の相違が，分担地域の違いを示すという見解は，この後の今津地区における元寇防塁第２次調査（福岡市教育委員会編1969）に生かされることになる。

【調査終了後】

大部分は埋め戻しを行ない，地中にて保存しているが，かつてより露出していたＡ地点については，補修・整備工事の後，露出展示が行われた。

元寇防塁第７次調査（池崎2001，荒牧編2001）

【調査の経緯・方法】

1967年に実施された元寇防塁第１次調査の成果（福岡市教育委員会編1968）に基づき，生の松原地区の元寇防塁は一部が整備・公開されたが，その後30年が経過し再整備の必要性が生じた。新規の整備では石墨の復元も計画しており，この第７次調査は復元整備の基礎データ収集を目的とするもので，第１次調査で発掘を行なったＡ５～７区，A11区，A16区の再調査を行なっている。

【防塁の構造】

Ａ５～７区の防塁は，砂丘頂部より海寄りに築造され，前面基底石は砂丘を一段掘り下げて据えており，基底部の標高は前面3.5m，背面3.9mで，背面側が前面よりも高い位置にある。石墨は前面で高さ1.5m，石積み４～５段分が遺存しており，幅は基底部で1.5m，上端で1.25mである。石墨石積みは，前面と背面に大形の塊石を使用し，その内部には小礫と砂を充填する。石墨の背面側には，砂丘頂部を削り込むようにして造り出された幅1.8m程の平坦面が存在し，その上に粘土と砂を交互に積み上げており，ちょうど石墨の背面が盛土で覆われた体裁となっている（後背盛土）。盛土の後方から，砂丘面は約20°の傾斜で落ち込みをみせている。

A11区の防墨は，基本的にはＡ５～７区の防墨と同じ構造であり，こちらの方が遺存状況は良い。石墨は前面で高さ1.6m程が残り，幅は基底部で1.4m，上端で0.9mである。基底石は砂丘面に直接据えられており，基底部の標高は，前面側が3.15m，背面側が3.5mと背面側が高くなっている。石墨の背面には，砂丘頂部を削りだして造成した幅3.1mの平坦面があり，その上に粘土と砂の互層よりなる後背盛土を施しているが，防墨の背面は後背盛土から砂丘へと連続する約35°の傾斜面となっており，調査担当者は「砂丘そのものも防墨構造の一部に取り込まれている」と判断している（池崎2001：８頁）。

A16区の防墨は，前面で高さ1.6m程が残り，幅は基底部で1.6m，上端で1.1mである。基底石は

砂丘面に直接据えられており，基底部の標高は，前面側が2.6m，背面側が3.1mと背面側が高い。石塁の背面には，砂丘頂部を削り出した平坦面があり，その上に粘土と砂の互層よりなる後背盛土があることは他と同じであるが，ここでは平坦面が幅４m程と広く，その後方の傾斜も緩やかなものとなっている。

【使用石材】

石塁を構成する主な石材には，ペグマタイト（巨晶花崗岩），花崗岩，砂岩，玄武岩があるが，今次調査で確認した石塁石材はほぼ砂岩である。ペグマタイトは長垂海岸，花崗岩は長垂海岸及び丘陵部といったペグマタイト産地の周辺部，砂岩は愛宕山，小戸，妙見崎といった当地区東側に存在する丘陵部，玄武岩は使用状態が角のとれた円礫～亜円礫状態であることから能古島西海岸と，採取地が推定された。これらは元寇防塁第１次調査時の所見（福岡市教育委員会編1968）と大差なく，いずれも近辺で採取されたと考えられている。第１次調査の際，Ａ５区において東側では砂岩，西側ではペグマタイトと，使用石材がはっきり分かれた境目が確認され，この境目は担当地域の違いが表れたものと解釈されたが，今回の報告では，境目より東側8.4mまではほとんど砂岩のみを使用し，基底部に巨石を用いるなど，大形石材を多用しているのに対し，西側7.4mまでは，ペグマタイト・花崗岩以外の石材はほとんど無く，目地が通った整然といった積み方をしているなど，特に境目付近において東西石塁の違いが顕著に表れていることを指摘し，この境を分担国の違いとする見解を裏付ける所見を提示する（荒牧編2001：25・26頁）。

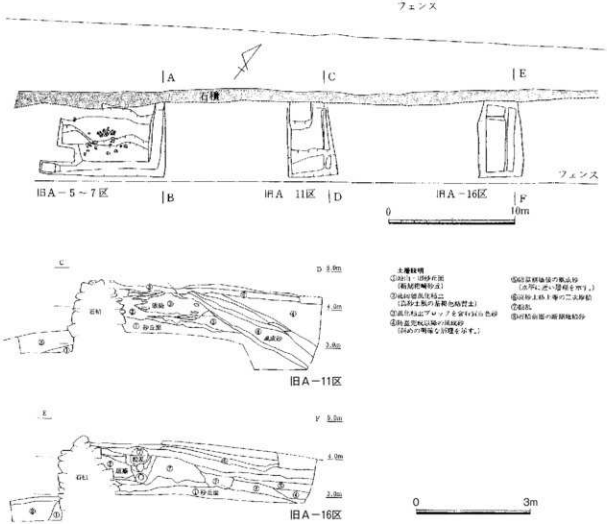


図８　元寇防塁第７次調査（1/300・100）

【特記すべき調査成果】

今次調査によって，第1次調査時におけるＡトレンチ内石墨の状況がより詳細に明らかとなった。報告書では，この調査所見を元に石墨の復元を試みている（荒牧編2001：26・27頁）。生の松原地区における元寇防墨の様子を描写した『蒙古襲来絵詞』の元寇防墨上における武者の姿から，①石積みの背後，つまり後背盛土の上面は，武者二人が重なり合うことができる広さがある，②武者の立つ後背盛土面と石墨上端とは，草摺以下が隠れる程の比高差がある，と考え，石墨後背の武者走りの幅を１m，石墨上端との比高差を0.7mと仮定し，これを最も遺存状況の良い次調査Ａ11区石墨における調査所見に当てはめ，石墨の高さを2.5m程に復元した。

【調査終了後】

調査の後，防墨復元を伴う再整備が実施された。

３．姪浜地区

博多湾岸の中央部付近に位置し，元寇防墨は，西の十郎川河口から小戸山や妙見崎といった小丘陵を経て東の愛宕山へと至る，長さ２kmの海岸砂丘上に存在する。これまでに元寇防墨第４・13次調査が行われており，向浜地区と脇地区という２カ所の史跡指定地が存在する。

元寇防墨第４次調査（柳田1984・1988）

【調査の経緯・方法】

史跡指定地（脇地区）の西側隣地における開発に伴い，1978年10月に２カ所（東よりＡ・Ｂ区か）の確認調査が行われた。

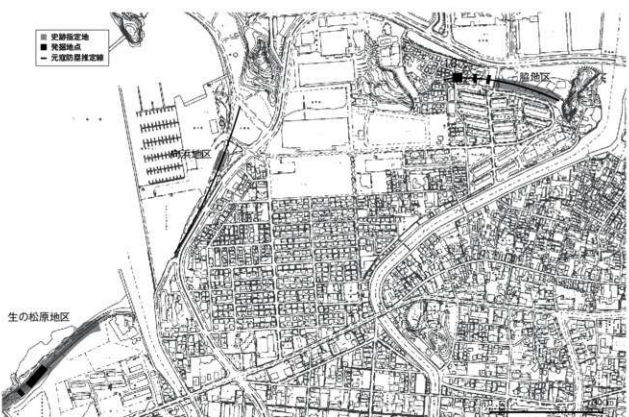


図９　姪浜地区（1/10,000）

【防塁の構造】

A区はすでに破壊を受けており，小礫が残るのみであった。B区は3～5段の石積みを持つ石塁が確認されている（図版2：3段右か）。基底部の幅は4mで，全体を石積みし粘土の使用はない。

【使用石材】

近在する愛宕山一帯で採取できる砂岩を使用している。

【特記すべき調査成果】

他地区の例に比べて，石塁の基底部幅4mは広く，後述する西新地区の元寇防塁（元寇防塁第8次調査）との関係を考える上でも興味深い。

【調査終了後】

検出した遺構は，埋め戻しの後，地中にて保存されている。

元寇防塁第13次調査

【調査の経緯・方法】

共同住宅建設に伴う事前の埋蔵文化財審査に際し，届出地内の2カ所でトレンチ調査が行われた。

【防塁の構造】

いずれのトレンチにおいても，現地表下0.4～0.5m下の白色砂質土中に，石塁の一部と目される石材を検出している。特に東側の第1トレンチでは，間隔約4mで2列に並ぶ石材が確認されている。

【特記すべき調査成果】

第1トレンチで確認できた石材列は，幅が第4次調査で確認した石塁幅と一致しており，元寇防塁の一部であった可能性が高い。現地の標高は1.0～1.3mであるが，この地域は炭鉱による地盤沈下が激しい場所であるためで，元寇防塁本来の位置はこれよりも高いものであっただろう。

【調査終了後】

工事立会により，建築建物の基礎は検出遺構に及んでいないことを確認しており，遺構は地中にて保存されている。

4．西新地区

博多湾岸の中央部付近に位置し，元寇防塁は，西の愛宕山から東の荒津崎へと至る，長さ3kmの海岸砂丘上に存在する。これまでに，元寇防塁第3・6・8次調査が行われており，藤崎地区，西新地区，地行地区という3カ所の史跡指定地が存在する。

元寇防塁第3次調査（福岡市教育委員会編1970）

【調査の経緯・方法】

元寇防塁の保存と活用を促進するため，九州大学鏡山猛教授を団長とする調査団により，1967～69年の3カ年にわたり実施された学術調査の一つであり，この第3次調査は1969年に行われた。

1920年に発掘調査され，1961年にその一部が復元修復された元寇防塁の保存工事と，指定地の公園整備を実施するための資料収集を目的とした調査であり，指定地内東側の最高所に設定した幅2mのトレンチをⅠ区，保存工事の対象となる東西の長さ33mの石塁露出部分をⅡ区として，調査を実施している。Ⅱ区の防塁は1920年の発掘以降，露出したままの状態で石積みの崩落などが進んでいたため，1961年の調査時に石材の積み直しが行なわれて旧状が損なわれており，そのため調査は写真撮影や石材の鑑定といった作業にとどまっている。よって報告はⅠ区の調査内容が主となっている。

【防塁の構造】

Ⅰ区の石塁（図版２：上・２段）は海岸へと傾斜する砂丘上に直接構築されている。石塁前面側における基底部の標高は3.3m，背面側の標高は3.5mと，背面側がわずかに高い。基底部における石塁幅は3.4mである。石塁前面は高さ1.5mまで遺存しており，大形石材６段を整然と積み上げ，石材の間には小石や砂を挟み込む。

石積みは，石塁前面の基底部に厚さ１m程にわたっていくつか（図上では３石）の基底石を配置した後，その背後に砂まじり粘土（Ⅱ層）を敷く。その後，前面石材２段目を同様に積み上げ，背後に粘土混じり砂（Ⅲ層）を敷く。このⅢ層は石塁構築工上の画期となっており，前面ではⅢ層上面，つまり３段目以上から石積み背後に裏込め石の使用が行なわれ，背面ではⅢ層上においた粘土（Ⅳ－１層）の上部より石積みを開始している。Ⅳ－１層は背面石積みよりさらに1.3m程後方にのびており，「後面石積みの安定をはかる基礎工事の役目にとどまらず，他の用途をも兼用するもの」であった可能性が指摘されている（５頁）。Ⅲ層上は粘土の使用も顕著となっており，前面の裏込め石は数層の粘土層によって安定化が図られている。前面の石積みは石材を複数列配置し，厚さも１m程で裏込めも使用するのに対し，背面は１～２列のみで裏込めも使用しない。前面と背面の石積みの間は，砂まじりの粘土と粘土まじりの砂を交互に積み上げており，これは1924年，西南学院大学内の道路工事中に発見された防塁（島田1925）の構造にほぼ一致する。

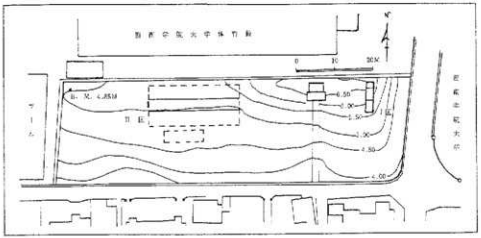
【使用石材】

Ⅰ区の石塁は砂岩が多く，礫岩，玄武岩，変成岩が少量存在する。Ⅱ区もほぼ同様の状況である。砂岩・礫岩はこの地区に一番近い愛宕山一帯，玄武岩・変成岩は能古島でそれぞれ採取された可能性が指摘されている。また防塁構築に多用される粘土は，皿山や祖原山に存在するもので，防塁構築に関する諸材料は，すべて当地区近辺で入手可能である。

【特記すべき調査成果】

粘土を多量に使用し入念な基礎工事をするなど，西新地区の防塁は，今津・生の松原地区の防塁に比して，強固なものであることが判明した。このように，今津，生の松原，西新の各地区はそれぞれで，石塁構造が異なっているが，今津，生の松原地区では石材や構築法の違いが築造分担国の違いを示しており，この結果は未だ判明していない西新地区の分担国を考える上でも興味深い。

図10　西新地区（1/10,000）



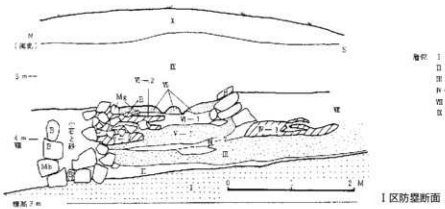


図11　元寇防塁第３次調査（1/1,000・60）

【調査終了後】

Ⅰ区のトレンチは埋め戻され，史跡指定地は公園整備を行ない一般公開している。なお，Ⅱ区の石塁は，補修や再整備の後，再び露出展示が行われている。

元寇防塁第６次調査（福岡市教育委員会編1998）

【調査の経緯・方法】

元寇防塁推定線近くにおける開発行為に伴い，確認調査を行なったところ，石塁石材である可能性がある石材を確認した。その検出石材について，1996年12月に調査を行なっている。

【防塁の構造】

調査区の西・東側にてそれぞれ石材を確認した。西側では地表面直下の風成砂層中に30～40cm大の塊石，東側では20～30cm大の円礫を主とする礫群を検出している。

【特記すべき調査成果】

これら石材は，原位置をとどめてはいないが，石塁石材であった可能性が高い。

【調査終了後】

記録を残した後，開発が行われている。

元寇防塁第８次調査（大塚編2002）

【調査の経緯・方法】

1999年に実施された，西南学院大学における校舎増築工事に伴う，記録保存のための発掘調査の際，調査区の東西にのびる石塁の一部及び土塁が確認された。

【防塁の構造】

石塁の遺存状況は悪く，石塁前・背面の石積みを部分的に検出したのみである（巻頭図版：下段上左）。石塁前面の石積みは，既存建物の影響によりほとんど失われており，基底石と裏込め石がわずかに残る。一方，背面の石積みは，調査区西側で比較的良好に残存しており，石列とその抜き取り痕が10m程度直線的にのびていることを確認できる。その中でも，調査区西端から５m程には，１～３段の石積みとそれに伴う裏込め石が残っている。背面石積みの石材は，前面のそれに比して，若干小さい。石積みの前・背面とも，遺存部分は直線的につながっており，それを元にすれば，石塁の基底部幅は４m程に復元できようか。両石積みの空隙地に石材は確認されておらず，過去の西新地区における石塁と同様，石積みの内部は砂・粘土等を充填していた可能性が高い。また，前・背面の石積みが砂丘面に貼った粘土層上に存在することも，第３次調査事例と共通する。

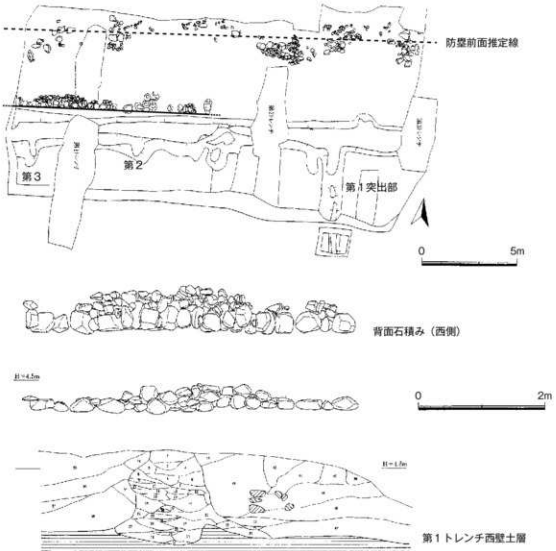


図12　元寇防塁第８次調査（1/200・60）

【使用石材】

原位置を留めた石墨石材には，蛇紋岩，角閃石，玄武岩等があり，蛇紋岩が半数以上を占め，蛇紋岩と角閃石で全体の８割を越える。このような塩基性変成岩を産出し，栗石形の自然石が多数存在する地として，報告書では毘沙門山東岸を挙げ，この地を石材採取地として想定している。

【特記すべき調査結果】

石墨の南側に土墨が検出された（図版２：３段左）。土墨は石墨から0.5m南側にあり，石墨に平行して東西にのびている。土墨は高さ１m程度が遺存しており，前・背面とも直立に近い角度で立ち上がっている。粘土と砂を交互に積み上げて構築しており，粘土・砂とも固くしまっている。土墨の背面には，陸橋状の突出部３（第１～３）があり，これも土墨と同じく粘土と砂の互層構造である。突出部第１と２の間隔は10.5m，第２と３の間隔は5.5mで，第１と２の間隔がほぼ倍となっているが，これは両者の中間に攪乱が及んでいるためで，本来は５～６mごとの等間隔で，突出部が存在した可能性が指摘されている。

１トレンチの調査結果によれば，土墨基底部上に風成砂層（47層）が堆積し，その上に粘土と砂の混合層（46層）を敷いた上で石墨を構築しており，石墨の構築に対し土墨の構築が先行する（図版２：３段左）。調査担当者は，土墨は他地域と同じく本来積み石を伴っていたが，その後の補修の際石材を取り払われ，その前面に新たな石墨が築造された可能性を指摘する（18－20頁）。土墨と石墨の関係は今後とも検討を続ける必要があるが，少なくとも防墨の後背部には，生の松原地区における元寇防墨第１・７次調査等で確認された斜面状施設だけではなく，陸橋状の突出部を持つ土墨が付属するという構造も存在したことは明らかである。

【調査終了後】

石墨の一部が他所に移され，復元整備の後，一般公開が行なわれている。

５．博多地区

博多湾岸の中央部東寄りに位置し，那珂川・御笠川の河口付近には砂丘が形成されているが，この地域における砂丘は3列存在することが明らかになっている。後述する博多遺跡群第111次調査の成果により，元寇防墨はこの3列のうちの最も海側，史料では「息浜」と呼ばれる砂丘の海岸近くに元寇防墨が存在していたことが確認された。

博多遺跡群第111次調査（佐藤編2002）

【調査の経緯・方法】

1998・1999年に実施された，小学校建築に伴う記録保存のための発掘調査の際，石墨遺構（元寇防墨）が発見された。調査は開発による影響の及ぶ範囲の全面発掘を行なっており，石墨遺構は小学校敷地の南東側にあたるⅡ・Ⅱ'・Ⅲ・Ⅲ'区において検出されている。Ⅱ'・Ⅲ'区は石墨の全容確認のための拡張区である。石墨の遺存状況から，全体を南西側から順にA～Eの５ブロックに分けて調査を行なっている。

【防墨の構造】

石墨は，途中途切れながらも南西－北東方向に53mにわたって検出されており，その幅は3.3～3.5mである。１～３段程の石積みが残り，高さは最も残りの良いところで1.3mである。石墨の北西側が前面（海側），南東側が背面（陸側）となる。標高2.9～3.8mの砂丘上に直接石材をおいて構築し

ており，前・背面に大形な石材を配し，その内部にやや小振りの石材を充填する。前面側の石材が，背面側の石材に比してやや大形であるのは他の地区と同じである。基底部の高さは，ほぼ同じ（Aブロック）か，前面がやや低い（B・Cブロック）。

Aブロックにおいて，前面石積みが一部，段状になっていることが確認された（巻頭図版：下段下左）。この段状部分は，前面２段目の石積みが１段目と面をそろえず，陸側へ入り込むことにより生じており，これは石塁補修（積み直し）の痕跡である可能性がある。意味は全く異なるが，同様の形態を示す事例は，生の松原地区における元寇防塁第１次調査でも確認されている。また，B・Eブロックで認められた石塁方向に直交する石列が，工程区分を示している可能性も指摘されている。

【使用石材】

礫岩と砂岩が圧倒的に多く，採取地はいずれも東区名島の沿岸一帯に推定されている。また砂岩には，表面に径数cmの円形の凹みが認められるものが存在するが，これは海岸部の水の影響を受けたものである。また，礫岩・砂岩以外に，塩基性岩類や玄武岩があるが，これらはほとんどが円礫～亜円礫状をなしており，能古島沿岸部で採取された可能性が高い。

【特記すべき調査成果】

報告では，この石塁遺構が，①規模と構造が今津地区の元寇防塁と非常に類似していること，②大きめの石を並べ区分を示す箇所がみられること，③砂丘に沿って構築されていること，④石塁前面から13～14世紀の遺物が出土していることから，元寇防塁である可能性は非常に高いとする（105頁）。これまで不明であった，博多地区における元寇防塁の位置が確定できたことは大きい。加えて，この石塁は前面石積み等に使用される石材が，他地域に比べてかなり大きく，当時の博多の町を防御するため，より強固な石塁を築いた可能性も指摘している（105頁）。

【調査終了後】

保存処理を行なった後，現状のまま地中保存が図られ，防塁の一部は地下の展示室において露出展示が行なわれている。

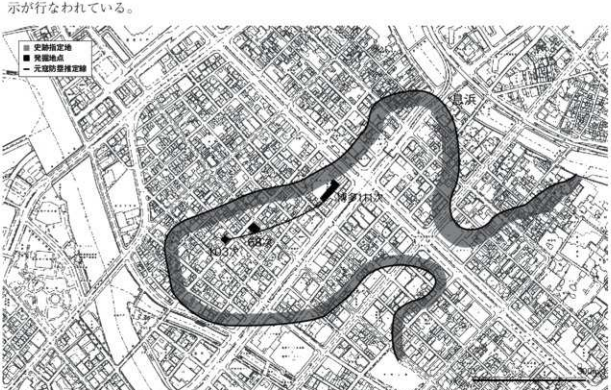


図13　博多地区（1/10,000）

図14　博多遺跡群第111次調査（1/500・100）

6．箱崎地区

博多湾岸の東側に位置し，元寇防塁は，西の御笠川から東の多々良川河口付近へと至る，長さ3㎞の海岸砂丘上に存在する。これまでに元寇防塁第5・9次調査，箱崎遺跡第81・83・85・87次調査が行われており，地蔵松原地区の史跡指定地が存在する。

元寇防塁第5次調査（福岡市教育委員会編1995）

【調査の経緯・方法】

筥崎土地区画整理事業に係るJR鹿児島本線の立体交差事業に伴い，対象地に仮設鉄道を建設する計画があることから，工事区域内における元寇防塁の遺存状況を確認し，史跡に影響を与えない工法を検討するため，1993年5月に実施された調査である。対象地は国史跡指定地（地蔵松原地区）内であり，九州大学農学部の演習農場として使用されている。調査は，防塁推定線上に直交する幅3ｍのトレンチを設定して行われている。

【防塁構造】

地表下1.8ｍの黄褐色砂（風成砂）層上で，石塁を構成する可能性の高い，大きさ50㎝程の石材を検出した。防塁の遺存状況は悪く，構造は不明である。

【使用石材】

調査担当者により，花崗岩もしくは礫岩であると判断されている。

【特記すべき調査成果】

元寇防塁の推定線上に，一定の根拠を与えることができた。

【調査終了後】

調査後，埋め戻しを行なっている。工事は，遺構に影響を与えないよう実施されており，遺構は地中に保存されている。

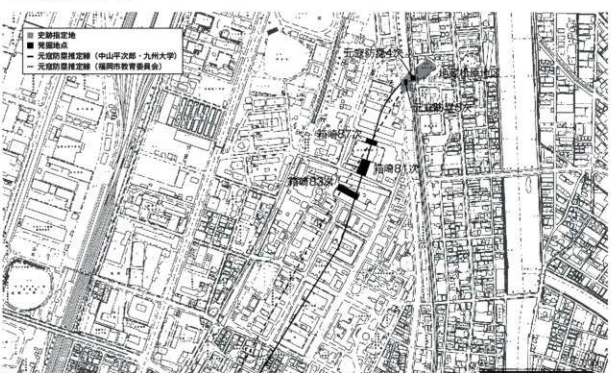


図15　箱崎地区（1/10,000）

元寇防塁第９次調査（福岡市教育委員会編2002）

【調査の経緯・方法】

筥崎土地区画整理事業に係るJR鹿児島本線の高架事業に伴い，史跡指定地（地蔵松原地区）の間隙において橋脚を建設する計画があることから，工事区域内における元寇防塁の有無を確認するため，開発予定地に６×７ｍの調査区を設定し，2000年９月に実施された調査である。

【防塁構造】

黄褐色砂層（２ｂ層）～黄褐色粗砂層（3層：砂丘基盤層）上にて，石列を確認している。石列は調査区のほぼ中央部に人頭よりやや大ぶりな自然石十数個が北東－南西方向に数十cmの間隔をおいて直線的に並ぶもので，その南側後背部には拳大の小礫がその石列より浮いた状態で検出されている。石列は石塁の基底石，小礫は裏込石と考えることができ，石列上面の標高は1.3～1.4mである。

【使用石材】

礫岩を主体とし，砂岩が少量含まれる。

【特記すべき調査成果】

元寇防塁の所在を確認することができた。また，石列の覆土中からは土師皿等が出土しているが，元寇防塁の築造時期と矛盾するものではない。

【調査終了後】

設計変更で，工事は調査区外で実施されることになった。遺構は地中に保存されている。

箱崎遺跡第81・83・85・87次調査（福田・森編2018，福岡市教育委員会編2018）

（九州大学埋蔵文化財調査室：HZK1603・1604・1701・1702・1704～1706次調査）

【調査の経緯】

九州大学箱崎キャンパスの移転に伴い，九州大学埋蔵文化財調査室により継続的に実施されている埋蔵文化財調査である。

【防塁の構造】

2016年に実施された第81次調査（HZK1603次・1604次）の際，北北東方向に向かって直線的に並ぶ石積み遺構が，４カ所（SF01～04）確認されている。この石積み遺構は海岸砂丘上に築造され，土台木や杭木による補強は確認されていない。石積み基底部の標高は約2.2mである。

最も遺存状況の良いSF01では，全長13.7mで，大形礫の石積みが最大３段残る。石積みは一部横目地が通り，間詰め石や裏込め石を使用している。高さは最大で約0.9mである。そして，石積み背面には，後方へ緩やかに下降する傾斜面を持つ盛土があり，背面石積みは確認されていない。盛土部分の土層観察では，作業上の小単位が分層可能であり，基底石下には厚さ数十cmの整地層が存在する。この整地層は比較的しまりがあり不純物が目立たないことから，担当者は，ある程度の選別過程を経ていると考えている（福田・森2018：55頁）。

また同様の石積み遺構は，第81次調査の南側で2017年実施の第83次調査，第81次調査の北側で2017～2018年実施の第87次調査（HZK 1706次調査）においても確認されている。

【使用石材】

礫岩，砂岩であり，近隣で採取が可能である。

【特記すべき調査成果】

一連の調査で検出した石積みは，所在が詳細な地表観察を行なった中山平次郎が示す元寇防塁推定位置と一致し（中山1913b，岩永2018），その延長は地蔵松原地区の史跡指定地につながっており，

元寇防塁であると考えて良い。この防塁は，前面に石積みとその裏込石があるのみで，背面に石積みはなく盛土による斜面が存在し，石塁というより石垣状を呈するという構造や，粘土等を用いず現地で採取した砂のみを用いた地業といった，これまでに無い構造が明らかになったことも大きな成果である。

ところで，九州大学は元寇防塁調査に関連し，旧地形復元のためのジオスライサー調査をHZK1701地点で2017年に実施しており，その結果，防塁の20～30m先に当時の汀線があったこと，そして防塁が存在する砂丘（浜提）の背後は，幅15mの溝状遺構が付随していたことが判明している。この溝状遺構は，2017年に実施された第85次調査，またこの調査区の北東側で実施された第87次調査（HZK1704次調査）でも確認されており，調査担当者は，元寇防塁を構成する一部として認定すべきだと考えている（福田・森編2018：146頁）。

【調査終了後】

いずれの調査においても，検出した石積み等の遺構は，埋め戻して地中に保存している。

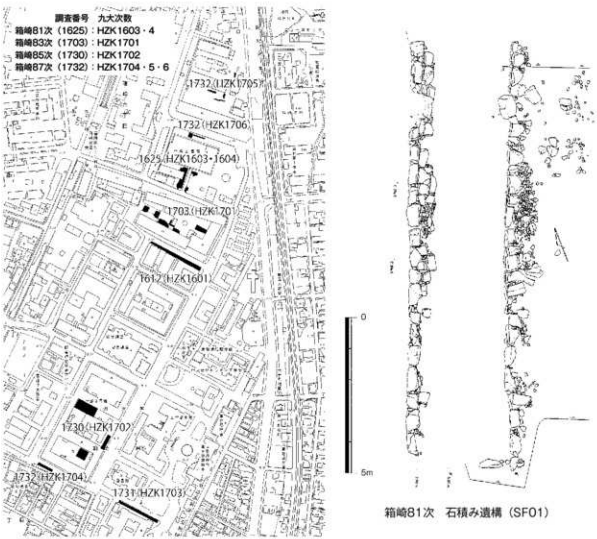


図16　箱崎遺跡第81・83・85・87次調査（1/6,000・120）

第Ⅲ章　総括　―元寇防塁調査の成果と課題―

1960年代後半における元寇防塁第１～３次調査は，考古学と文献史学の協業により数々の成果を挙げ，今日における元寇防塁研究の礎となったと評価できる。その際，ＩＡ・Ｂ類を主とする元寇防塁の基本構造が明らかとなり，この後，西新地区や博多地区などの事例が積み上げられた。

しかし，九州大学による箱崎遺跡調査が明らかにした防塁Ⅱ類の存在は，我々に様々な疑問を投げかけることとなった。まず１つは，防塁の形態や構造に関する決定を誰が行なったのかということである。壁面ａ類とｂ類の違いは，使用石材に由来するもので，両者の強度面における差は，断面構造Ａ，Ｂ類の選択にも当然影響を与えただろうし，防塁Ⅱ類で選択されたｃ類は，土止めに最適な構造であるといえる。用石法に関するこれら要素は，粘土や石材の入手という地域的制約の中で地域ごと，つまり分担国ごとに最善を選択・決定したと解することもできる。しかし，防御施設としての機能面に大きく関わる，防塁Ⅰ，Ⅱ類の選択や石塁幅・高の決定は，地域個々が判断可能な範疇を明らかに超えている。元寇防塁全体の構想を立て，作業の指示・調整を行なう者の存在も考慮する必要があるのではないか。今後は地域個別ではなく，総体を俯瞰する研究視点も求められる。

もう一つは，防塁Ⅰ類の後背部構造がどの様であったかということである。構造上，防塁Ⅱ類の背後には傾斜面が付属することになるが，防塁Ⅰ類でも早くから同様の設備の存在が想定されており（中山1915ｂなど），史料にみる「裏加佐（うらかさ）」（文中では後背盛土と記している）がこれに相当すると考えられている[註1]（川添1968）。過去に存在を窺わせる調査所見もあるが（史蹟現地講演会編1915：362頁）具体的内容が明らかになっているのは，生の松原地区のみである（元寇防塁第１・７次調査）。この後背盛土の他，土塁（元寇防塁第８次調査）や溝（箱崎第81・85・87次調査）など，石塁後背部に付属する設備等が次第に明らかになっている。元寇防塁を単なる防壁ではなく，敵の侵入を防ぎ，反撃の拠点となる軍事施設と捉える視点は重要であり（川添2006），今後の考古学的調査において，防塁後背部におけるこれら設備・施設の究明にも努める必要があるだろう。

表２　元寇防塁の構造分類

防塁	断面構造	石塁幅	粘土使用	防　塁　名
Ⅰ類	A	狭	有	元寇防塁1・7次〔生の松原〕(a類)
		中	無	元寇防塁2次〔今津〕，元寇防塁11次〔今津〕(b類)，博多111次（a類）
		広	無	元寇防塁4次〔姪浜〕？
	B	中	有	元寇防塁3次〔西新〕(a類)
			無	元寇防塁2次〔今津〕，元寇防塁14次1区〔今津〕(b類)
		広	有	元寇防塁8次〔西新〕
Ⅱ類			無	箱崎81次（ｃ類），元寇防塁12次2区？（ｃ類）

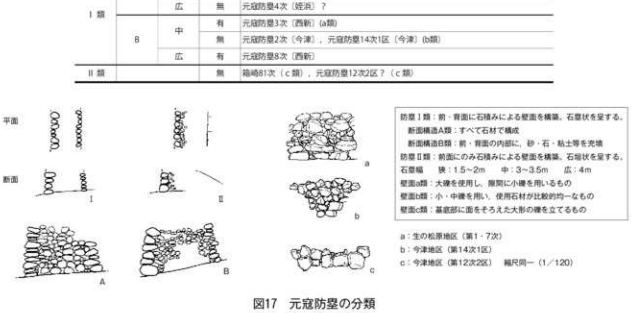


図17　元寇防塁の分類

註1）「裏加佐」という言葉が，文書の中では「石築地」とは独立的，相対的に扱われているとする指摘は重要であり，「裏加佐」が後付けされた可能性も指摘されている（川添1968：16頁）。

おわりに

本書は現状における成果を短期間でまとめたものであり，元寇防塁第１～４次調査の未公開資料や，元寇防塁第11～14次調査などの未報告資料等，掲載や論述に未だ不十分な点も多い。また，福岡市文化財地図に記載している元寇防塁推定線にも，再検討すべき箇所が存在する。また機会を改めて，これら責を果たしたい。

文献一覧

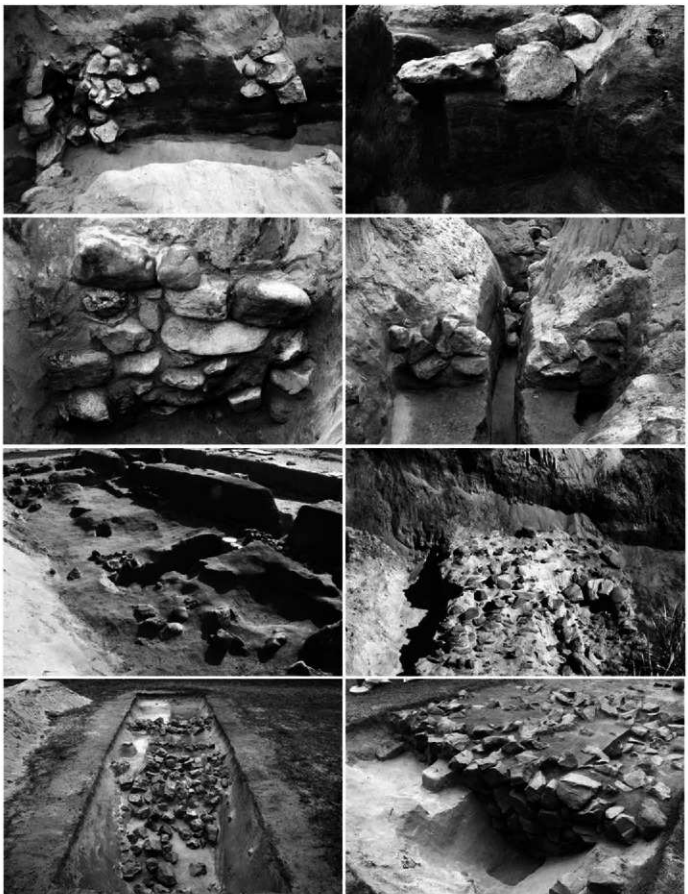
荒牧宏行編2001『国史跡元寇防塁（生の松原地区）復元・修理報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第694集
池崎謙二2001「史跡元寇防塁第７次調査報告書」『国史跡元寇防塁（生の松原地区）復元・修理報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第694集
池田裕司2016「西部地域の遺跡発見と調査のあゆみ」『新修　福岡市史』資料編考古①
井澤洋一編1992『博多32』福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集
伊藤慎二2017「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構」『西南学院大学　国際文化論集』第31巻第２号
岩永省三2018「中山平次郎の元寇防塁位置研究と九州大学キャンパス」『箱崎遺跡』九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告１
大塚紀宣編2002『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第726集
大塚紀宣編2007『香椎地区遺跡確認調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第926集
大塚紀宣2013「元寇防塁と博多湾」福岡市史編集委員会編『新修　福岡市史』特別編　自然と遺跡からみた福岡の歴史
川上市太郎1941「元寇防塁」『元寇史蹟（地之巻）』福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第14集
川添昭二1968「文献からみた元寇防塁」「生の松原元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第３集
川添昭二1971『註解　元寇防塁編年資料』福岡市教育委員会
川添昭二1977『蒙古襲来研究史論』中世史選書１　雄山閣
川添昭二2006「元寇防塁が語るもの」『市史研究ふくおか』創刊号　福岡市史編さん室
木下謙太郎1915「元寇防塁の石」史蹟現地講演会編『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社
佐藤一郎編2002『博多85』福岡市埋蔵文化財調査報告書711集
史蹟現地講演会編1915『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社
島田寅次郎1925「西新町（百道原）新発掘元寇防塁の横断面」「筑紫史談」第34集　筑紫史談会
武谷水城1921「多々良以東に於ける元寇防塁の有無に就いて」「筑紫史談」第24集　筑紫史談会
武谷水城1922「多々良以東元寇防塁有無に就いての補足」「筑紫史談」第25集　筑紫史談会
中山平次郎1913a「福岡付近の史蹟」九州帝国大学医科大学雑誌部
中山平次郎1913b「箱崎の石塁」「福岡日日新聞」（中山1984『箱崎の石塁』「古代乃博多」九州大学出版会より）
中山平次郎1915a「元寇当時の防塁と博多湾の地形変化」史蹟現地講演会編『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社
中山平次郎1915b「元寇役防塁址と博多湾沿岸の地形変化（上）」「歴史地理」第25巻第３号　日本歴史地理学会
西園禮三・柳田純孝2001「元寇と博多　写真で読む蒙古襲来」西日本新聞社
福岡市教育委員会編1968「生の松原元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第３集
福岡市教育委員会編1969「今津元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第４集
福岡市教育委員会編1970「西新元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集
福岡市教育委員会編1978「史跡元寇防塁保存管理計画策定報告書」
福岡市教育委員会編1995「地蔵松原元寇防塁」「福岡市埋蔵文化財年報」Vol.８
福岡市教育委員会編1998「元寇防塁第6次調査」「博多遺跡群第103次調査」「福岡市埋蔵文化財年報」Vol.11
福岡市教育委員会編2002「元寇防塁第9次調査」「福岡市埋蔵文化財年報」Vol.15
福岡市教育委員会編2016「元寇防塁第11次調査」「福岡市埋蔵文化財年報」Vol.30
福岡市教育委員会編2017「元寇防塁第12次調査」「福岡市埋蔵文化財年報」Vol.31
福岡市教育委員会編2018「箱崎遺跡第83次調査」「箱崎遺跡第85次調査」「箱崎遺跡第87次調査」「福岡市埋蔵文化財年報」Vol.32
福田正宏・森貴教編2018「箱崎遺跡」九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告１　九州大学埋蔵文化財調査室
堀本一繁2010「蒙古襲来と博多」高橋慎一朗編『史跡で読む日本の歴史』６　吉川弘文館
堀本一繁2018「史跡元寇防塁地蔵松原史跡指定地について」「箱崎遺跡」九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告１
柳田純孝1984「元寇防塁と博多湾の地形」「古代乃博多」九州大学出版会
柳田純孝1988「元寇防塁と中世の海岸線」「よみがえる中世」１　平凡社

図出典

図２：大塚2013，図３・４：福岡市教育委員会編1969，図７：福岡市教育委員会編1968，図８：荒牧編2001，図11：福岡市教育委員会編1970，図12：大塚編2002，図14：佐藤編2002，図16：福田・森編2018，図17の一部：柳田1984，荒牧編2001（改変のち再トレース）

図 版 1

上段　左：元寇防塁第２次（今津）Ⅰ－③区石塁断面（北東から）　右：元寇防塁第２次（今津）Ⅱ－③区背面（南東から）
中段　左：元寇防塁第２次（今津）Ⅳ－②区石塁検出状況（東から）　右：元寇防塁第２次（今津）Ⅳ－②区石塁背面（南西から）
下段　左：元寇防塁第２次（今津）Ⅲ区－⑫～⑳石塁検出状況（西から）
　　中：元寇防塁第１次（生の松原）Ａ・Ｂ地点石塁検出状況（西から）
　　右：元寇防塁第１次（生の松原）Ａ－２区背面（南から）



上段　左：元寇防塁第３次（西斬）Ⅰ区防塁断面（西から）　右：元寇防塁第３次（西斬）Ⅰ区防塁粘土層（南西から）
２段　左：元寇防塁第３次（西斬）Ⅰ区防塁前面（北から）　右：元寇防塁第３次（西斬）Ⅰ区防塁背面（南から）
３段　左：元寇防塁第８次（西斬）石塁・土塁（北西から）　右：元寇防塁第４次（姪浜）詳細不明
下段　左：元寇防塁第12次（今津）２区後背斜面（南から）　右：元寇防塁第14次（今津）１区石塁前面（北西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	げんこうぼうるい
書名	元寇防塁
副書名	調査総括報告書
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1382集
編著者名	蔵冨士　寛
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神一丁目８番１号
発行年月日	2019年（平成31年）３月25日

所収遺跡名	種　別	時　代	遺　構	遺　物	特記事項
元寇防塁	城　館	中世（13世紀後半）以降	元寇防塁（石塁，後背盛土，溝等）		今津・生の松原・姪浜・西新・箱崎の各地区において、これまでに第１～14次の発掘調査を実施。
博多遺跡群					第111次調査において、元寇防塁である可能性の高い石塁遺構を検出。
箱崎遺跡					第81・83・87次調査において、元寇防塁である可能性の高い石積み遺構を検出。また、この遺構の後背部には、幅15mの溝が伴う。

要　約

本書は，1967年に実施された第１次調査以降の元寇防塁発掘調査を概観し，その成果と課題を述べるものである。1960年代後半に実施された元寇防塁第１～３次調査は，考古学と文献史学の協業により数々の成果を挙げ，元寇防塁研究の礎となったと評価できる。調査によりＩＡ・Ｂ類を主とする元寇防塁の基本構造が明らかとなり，この後，西新地区や博多地区などの事例が積み上げられた。

しかし近年では，箱崎遺跡調査で元寇防塁Ⅱ類というこれまでにない形態の資料も確認されており，今後は地域個別ではなく，全体からみた元寇防塁の構造理解や，不明な点も多い防塁Ⅰ類の背面に付属する設備の究明も進める必要がある。

元寇防塁

調査総括報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1382集

2019年（平成31年）３月25日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　魚住印刷
福岡市博多区大博町８－20